

『翔んだカップル』がもたらしたもの

信時哲郎

(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科)

はじめに

『翔んだカップル』(柳沢 1978-1983)を覚えているだろうか? 柳沢きみおが「少年マガジン」に連載した漫画で、少年誌で初めてラブコメを扱ったとされている¹。1980年には相米慎二監督、鶴見辰吾・薬師丸ひろ子主演で映画化され、同じく80年の秋にはフジテレビ系でドラマ化されるほどの人気であった。

しかし、管見のかぎり宮台真司を筆頭著者とした『サブカルチャー神話解体』(宮台・石原・大塚 1993)²やサイト「みな翔ていった」(<http://hp1.cyberstation.ne.jp/minakaketeitta/> 最終アクセス 2013.1.31)などが高く評価している以外に、この作品を正面から論じた例はあまり見当たらない。高橋留美子の『めぞん一刻』(高橋 1980-1987)や、あだち充の『タッチ』(あだち 1981-1986)を知らない人はいないと思うが、これらに比べると知名度もずっと低いように思う。おそらくそれは、連載後半になると人気も低迷し、作者自身も「この13巻あたりの翔んカブは絶望の中でヤケのやんぱちでかいていてそして無理やりに終わりにしてしまった」と語っていることとも関わっているかと思うが(柳沢 1986b, 215)、それにしても『翔んだカップル』の評価が低すぎるような気がしてならない。というのも『翔んだカップル』が漫画史上初の少年向けラブコメであったというだけでなく、その影響が今日にまで広く深く及んでいるように思うからだ。

「女子学研究」に掲載する文章としては、あまりふさわしくないかもしれないが、男性の側から見た1980年代について考えることは、女性にとっての1980年代を考える上でも役に立つこともあるかもしれない。そう聞き直って、考察をすすめることにしたい。

『翔んだカップル』の意義

柳沢きみおは1948年に生まれた団塊世代の漫画家である。新潟県立村松高校在学中に漫画の投稿を始めるが、全く認められることはなく、上京して和光大学人文学部芸術学科に入学。しかし、パチンコに明け暮れ、ろくに大学に行くこともなく中退。このままではいけないとスイッチを入れ直して漫画の持ち込みを始め、1970年に「少年サンデー」で「デワタン一座」が佳作に入選し、同年、「少年ジャンプ」に「ズンバラピン」を載せてプロデビュー。『トイレット博士』を連載して人気だったとりにかずよしの元でアシスタントを務め、1973年に「少年ジャンプ」で『女だらけ』(柳沢 1973-1975)の連載を開始。コミックスも7巻まで刊行された。しかし、その後はヒットに恵まれず、「少年ジャンプ」のアンケート主義や専属制度になじめず、集英社を去ることになる。背水の陣で「少年チャンピオン」に原稿を持ち込んだところ『月とスッポン』(柳沢 1976-1982)の連載を始めることとなり、全23巻のロングラン。また、「少年キング」でも『すくらんぶるエッグ』(柳沢 1977-1980)の連載を開始し、これも全12巻のヒット作となった。これら2作品を週刊誌に連載している途中で「少年マガジン」から声がかかり、書き始めたのが『翔んだカップル』であった。

『翔んだカップル』は「高校生がひとり暮らしする一軒家に、異性が飛び込んで来たらどうなるか」(柳沢 2010, 80)という導入から始まる物語で、作者自身は次のように書いている。

¹ 『現代漫画博物館 1945-2005』(竹内・米沢・ヤマダ 2006)、ササキバラ・ゴウ『<美少女>の現代史』(ササキバラ 2004)、『エロマンガ・スタディーズ』(永山 2006)などにそうした記述がある。

² 宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体 少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』(パルコ出版:1993.10)の中で、「翔んだカップル」を扱った第3章2節は「青少年マンガのコミュニケーション:中編」と題され、1993年2月に「アクロス」で発表しているが、この論文の著者の順番も宮台・石原・大塚となっている。

一緒に暮らすことになるのは、飛びきりの美少女、ハキハキして明るく、頭もいい、運動神経も抜群の圭です。こんなことが現実に起こるとはつゆ知らず、主人公の勇介は、晴れて入学した名門高校の入学式から家に帰ってみると、そこに引っ越しトラックが止まっています。実は勇介は、海外赴任で家を開けた叔父夫婦の留守番役。広い家で一人暮らしをするにあたり、もったいないので、間借り人を探していたことにしました。その間借り人が、さっき入学式で会ったばかりの美少女だったというわけです。

主人公はボクシングで文字通り格闘をしています。これはただの小道具で、本番はあくまでも恋愛の方です。高校生という、人間関係が複雑になり、思考も深まっていく中で、友情と恋愛の折り合いの付け方や、大人になっていく成長過程での様々な葛藤が増えていく中、彼らが人生とどう格闘していくのかを物語の中心に据えています。

意中の女の子を獲得するために、ほかの男ではなく自分を選ばせる格闘であったり、ほかの女性に目移りばかりしてしまう弱い自分との格闘であったり、その意中の女の子との意地の張り合いといった心理戦における格闘こそが、当時の男の子たちの最大関心事だと踏んだのでした。(柳沢 2010, 80)

柳沢の狙いは、見事に的中したわけだが、きっかけは「少女マンガはラブコメ中心なのになぜ少年誌には1本もないのだろう」という疑問であり、これが「作者もビックリの大ホームランに!!」(柳沢 1986b, 211) になったのだという。

ところで、『月とスッポン』や『すくらんぶるエッグ』は、それぞれラブコメといってもいい内容の作品であるが、本人が『翔んだカップル 新装版』のあとがきに「(ラブコメは)ほんとに10年前には1本もなかったのですよほんとだよ」(柳沢 1986b, 211) と書いていることからすると、先行する2作品をラブコメであるとは思っていないようだ。

それは、これらが『翔んだカップル』ほどの大ホームランでなかったこともあるが、「少年キング」という準一流誌ともいべき雑誌に連載された『すくらんぶるエッグ』はともかく、当時の「少年チャンピオン」は、黄金時代の真ただ中ともいべき時期であり、同時期には水島新司の『ドカベン』(水島 1972-1981)、手塚治虫の『ブラック・ジャック』(手塚 1973-1978)、山上たつひこの『がきデカ』(山上 1974-1980)、鴨川つばめの『マカロニほうれん荘』(鴨川 1977-1979)などが連載されており、ここでコミックス23巻分の連載をするということは、そうとうの成果であったはずなのに、である。

しかし、オンタイムで3作を読んでいた自分にとっても、衝撃的であったのは『翔んだカップル』であり、他の2作は、平和で人畜無害なラブ・ギャグ漫画(それを本来はラブ・コメディ、つまりラブコメと言うはずなのだが)ともいべきものに過ぎなかった。その違いはどこにあったのかと言えば、ストーリー漫画であったかどうかにかかると思う。『月とスッポン』や『すくらんぶるエッグ』でも、ゆるやかに時間は流れていたが、日常的な場面における失敗やドタバタをおもしろおかしく描くことがメインで、人間的な成長、人生の場面場面で得ること・失うことを描く姿勢には乏しかった。手塚治虫は「子どもマンガの中に、小説や映画のような複雑な物語を持ち込み、マンガを縛っていた枠を取り払ったことこそが、手塚ストーリーマンガの功績なのである」(中野 2004, 46)とされ、マンガの中にも人生や世界の深淵を見せたことから評価されているわけだが、これになぞらえて言えば、『翔んだカップル』は少年向け恋愛漫画の世界にストーリーを持ち込むことで、初めて少年たちに恋愛について、女性という存在と付き合っていくことについて真剣に考えさせる契機になったのではないかと思うのである³。

ただ、柳沢が『月とスッポン』を連載していたのは、先述のとおり黄金時代の「少年チャンピオン」であり、そこでギャグを描き続けるということは『がきデカ』や『マカロニほうれん荘』といった突き抜けたギャグセ

³ それ以前に愛をテーマにしたストーリー漫画『愛と誠』(梶原一騎・ながやす巧 1973-1976)があるのではないと言われるかも知れない。しかし、有名になった「きみのためなら死ねる」という言葉からもわかるように、ここに描かれているのは愛をめぐる文字どおりの死闘であって、日常的な空間が舞台になっているわけではない。

ンスをもった作品と勝負するということである。そこにギャグ作家が短命だという説や毎回ネタを捻出しなければならぬ苦勞についても本人は語っているとおりで（柳沢 2010, 74-79）（柳沢 1986a, 237）、それらがキャラクター設定やストーリーを重視させることに繋がったのだとも書いている（柳沢 2010, 76）。また、柳沢は『翔んだカップル』の「確か第五話目を描き上げた時点で、一度担当に「描くことがなくなったんで、もう辞めたい」と終了宣言をしている」（柳沢 2010, 110）とも書いているのだが、五話目といえば、まだストーリー漫画というよりは、『すくらんぶるエッグ』のような同居コメディの段階なので、どのようなものを少年誌向けのラブコメであると本人が思っていたのかはわからない。

しかし、そのような事情をどれだけ考慮にいられたとしても、『翔んだカップル』がストーリー・ラブコメとして最初の作品であり大ホームランであったことには変わらない。

『翔んだカップル』の時代背景

ところで、柳沢の最初の連載作品である『女だらけ』は、4人の姉にいじめられる弟・六助の物語であった（5女の五子だけは六助に優しい）。

1975年に「少年ジャンプ」に連載された『すみこみ学園』は、「女どもは団結しててとても勝てっこないよ」（柳沢 1976, 14）という徳川学園を舞台にしている。

1976年に「少年サンデー」に連載された『ぼくちゃん先生』（柳沢 1976）は、「超女性優位の学園」（柳沢 1977, カバー）に赴任した男性教師（実は小学生）を主人公にした漫画だが、男性校長に「あの教頭め、いつのまにか男ぎらいの先生ばかり採用し、生徒にもかたよった教育をしはじめたのだ……つまりウーマンリブ教育を!!」（柳沢 1977, 29）と言わせている。

1976年から「少年チャンピオン」に長期連載された『月とスッポン』は、勉強も運動もダメで、身長も低い土田新一と、美人で成績も優秀、身長も高くスポーツも万能、老若男女を問わず人気者の花岡世界の物語である。まさに月とスッポンの取り合わせだが、世界は子ども時代の新一のやさしさ、たくましさをおぼろげに忘れ、いつか新一を慕って「おにいちゃん」と呼んで世話をしている。

1977年から「月刊少年チャンピオン」に連載された『ミニぱと』（柳沢 1977-1979）は、美人で、正義感溢れ、腕力も強い五月婦警がミニぱとに乗って繰り広げるコメディだが、上司である西主任（男性）は、いいところを見せようと悪戦苦闘するものの、いつも失敗ばかり繰り返す。

こうして柳沢の初期作品を並べてみると、女性優位の設定になっているものの多さに気付く。つまり、柳沢の初期作品は永井豪の『ハレンチ学園』（永井 1968-1972）やとりいかずよしの『トイレット博士』（とりい 1970-1977）的なエッチ・ギャグ、下ネタ・ギャグをベースにしながら、古谷三敏による男女の地位逆転ギャグ漫画である『ダメおやじ』（古谷 1970-1982）の要素を融合させることで自分の世界を切り開こうとしていたということになりそうだ。

1978年から連載が始まった『翔んだカップル』も、女性が優位に立つ設定となっている。これまでの作品にくらべてリアリティの度が高まっているので見えにくいだが、主人公の勇介はボクシング部や陸上部で活躍し、そこそこの成績をおさめる運動神経のよさはあるものの、勉強の方はいつも下位。一方の圭は、先に柳沢の言葉として引用したように「飛びきりの美少女、ハキハキして明るく、頭もいい、運動神経も抜群」である（柳沢 2010, 80）。そして、勇介が、圭よりも相性がいいのではないかと感じてふわふわと誘われていってしまう相手の杉村秋美は、医者で、美人の秀才だ。

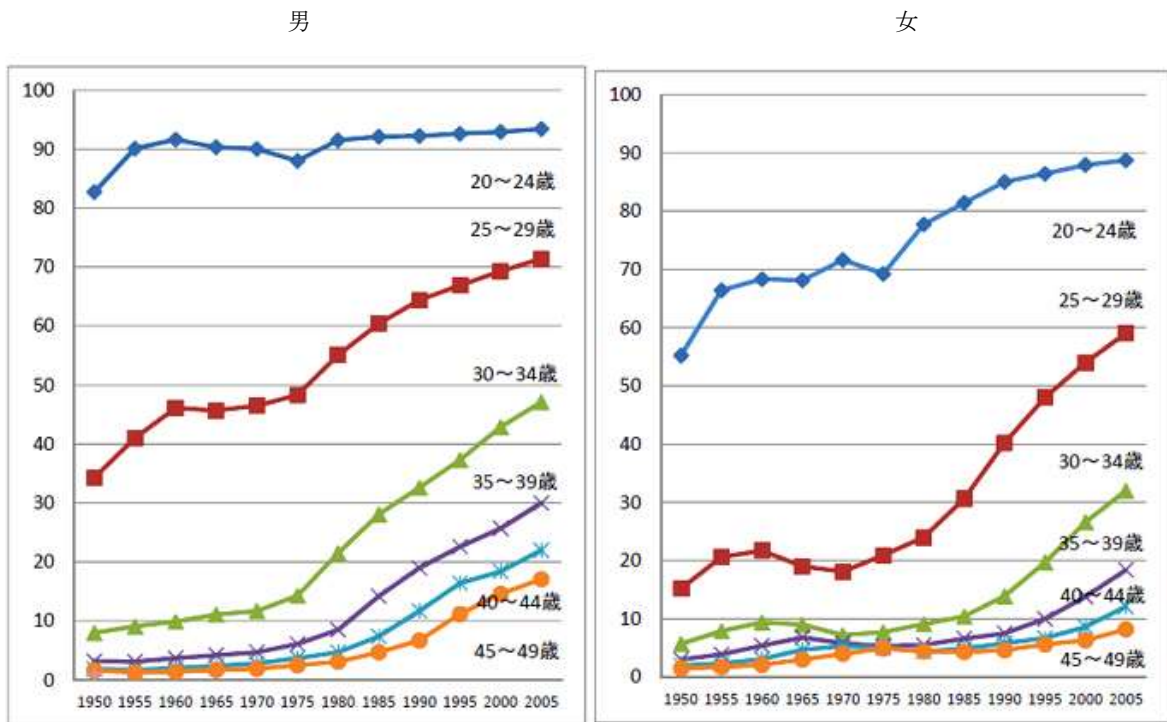
デビュー直後の柳沢がこうして女性優位社会を描き続けたというのは、『ダメおやじ』の影響もあるだろうし、柳沢には四人も姉がいたという生育環境も関わっているかもしれない。しかし、大きな背景として、女性の権利拡大と男性の権威失墜があったとすべきだと思う。

1970年代にはウーマンリブ運動をはじめ、1979年の女子差別撤廃条約の国連総会における採択など、女性たちが大きな躍進を見せた。そして男性たちは、これまでの傍若無人の振る舞いを改め（職場のヌードポスター

やコミュニケーションのためと称するボディタッチ等々)、女性の立場を気にしなくてはならない時代になったわけだが、こうした時代の空気を柳沢は敏感に感じ取ったのだろう。

女性の地位が高まり、社会進出が進むと晩婚化・非婚化の傾向が強まってくる。国勢調査によると、年齢別の未婚率は1970年代の後半から急上昇している。40代にもなれば未婚率が1~2%だったという敗戦直後のことなど、夢のような出来事であり、生涯に一度も結婚しない人も激増が予想される事態となっている。もちろん、21世紀の今日に比べれば、まだまだ深刻度は低いと思われるかもしれないが、こうした危険な兆候が見え始めた時にこそ、人々は強烈な危機感を感じるものだと思う。

20~44歳の年齢別未婚率の推移 (1950年~2005年) 男性・女性



恋愛結婚と見合い結婚の割合も、1960年代半ばには逆転し、その差は開く一方となっているが、そうした状況も、当時の男性たちを「恋愛をしなくてはいけない」と焦らせ、恋愛や結婚について真剣に考えさせるきっかけになったのではないだろうか⁴。

1976年創刊の「POPEYE」(平凡出版。現在のマガジンハウス)は、アメリカ西海岸のライフスタイルやファッションを紹介する雑誌であったが、1980年代になると「それまで扱わなかったセックス記事を掲載しはじめ」と言われている。この傾向がより著しかったのは講談社が1979年に創刊した「ホットドッグ・プレス」で、「いわゆる「デート・マニュアル」として人気を得ていた」という記述とともに、「性行為関連の話題も多く手がけたが、的外れな記述や目を疑うアンケート結果も多く「童貞が書いた童貞のバイブル」と揶揄された」ともある(両誌に関する記述は共にwikipedia。最終アクセス 2013. 1. 31)。

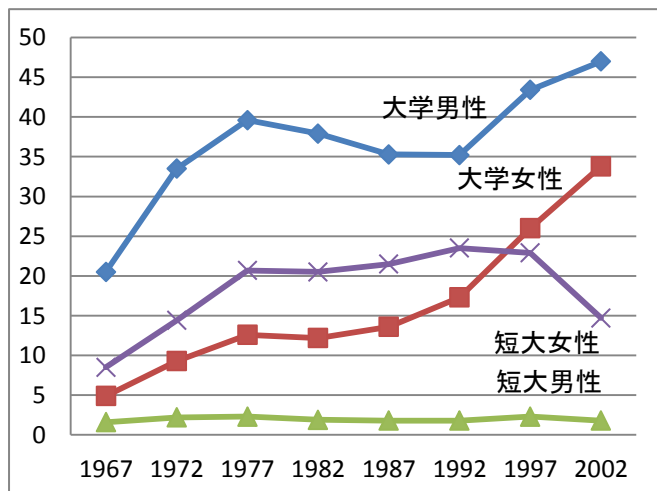
また、パロディ本、ジョーク本というべきかもしれないが、当時話題になった『見栄講座 ミーハーのための戦略と展開』は1983年に刊行され、その冒頭には次のようにあった。

もしあなたが、十人並みの容姿と、十人並みの才能と、十人並みの運動神経しか持ち合わせないごく平凡な人間で、それにもかかわらず、労せずして誰よりもカッコよく目立ち、努力無くして女の心にもてたい

⁴ 親や親戚が段取りする「見合い結婚」は減ったかもしれないが、「友人の紹介」というタイプの「見合い結婚」は、この頃から増え始めていたように思う。しかし、おそらくこれは「恋愛結婚」として申告されている例が多いのだろう。合コンや婚活パーティーも盛んだというが、これらも広義のお見合いだと言えるかもしれない。

と願う、虫のいい考えの持ち主であるなら、あなた！そう、あなたこそが、この本を読む資格の持ち主です！（ホイチョイ・プロダクション 1983, 8）

一方、女性たちは、この頃から大学や短大への進学率を上昇させ、文部科学省の学校基本調査によれば、大学・短大への進学率は下記のグラフの通りで、1987年には大学と短大をあわせれば女性の進学率は男性の大学進学率を抜くところまで達している。



1981年には現役女子大生をDJに起用した「ミスDJリクエストパレード」が文化放送で始まり、似た企画の番組も全国各地に生まれた。また、1983年にはフジテレビ系で「オールナイトフジ」が始まり、ここでも現役女子大生が起用され、女子大生ブームと言われる状況が誰の目にもつくようになった。

80年代になると、女性たちはアルバイトや就業等で可処分所得が増したため、ブランド品などの消費に走ったのだとはよく言われるところだが、カタログ小説・ブランド小説と揶揄された田中康夫の『なんとなく、クリスタル』（田中 1981）は、当時流行

していたブランドや店などに関する442個の注をつけたものであった。そして、この小説の主人公もモデルをしながら大学に通う女子大生であった。

1970年代から80年代にかけて、女性の高学歴化は進み、社会進出も進んだため、彼女らは好きなものを好きに消費して人生を謳歌し、仕事に邁進することができるようになった。恋愛や結婚が人生最大のテーマであったのは依然として変わらなかったかもしれないが、唯一のテーマではなくなった。それに伴って男性たちの出番が少なくなった側面はあるだろう。

『翔んだカップル』は、こうした時代であったからこそ生まれ、また、大ホームランとなったのだと言えるだろう。

『翔んだカップル』の構造

本宮ひろ志は『男一匹ガキ大将』（本宮 1968-1973）のような典型的なヒーローものの漫画を描いたことで知られるが、70年代半ばになると女性を優位においたキャラクター設定をしている。『硬派銀次郎』（本宮 1974-1978）では、主人公・銀次郎をケンカがめっぽう強い大親分として描きながら、背が低くて、両親がおらず、新聞配達をしながら生計を立てる女嫌いの少年にしている。女嫌いのはずの銀次郎と結婚の約束をする高子は、身長162センチで容姿端麗、医者^{ハート}の娘で、頭脳明晰だ。男の中の男を描く本宮漫画でも、強くなっていく女性の影響は無視できなかったということだろう。

『硬派銀次郎』のコミックス第2巻の巻末に収められた解説で、俳優の田村亮は次のように書いている。

現代はヒーロー不在の時代だという。かつては女性蔑視の風潮の中で、男性という特権的立場に安住していた男たちが、女性の権利の回復とともに、その自信を失い、かといって、高度に社会のしくみが発達してしまった現代のような時代においては、そうだれでもが英雄になれるわけではない。

世の多くの男性たちは、たったひとりの女性の心^{ハート}を射とめるためにさえも、どうしていいかわからず、四苦八苦している状態である。

こんな時代にあって『硬派銀次郎』の登場は、じつに小気味のいい印象をあたえる。

（田村 1976, 200）

これは1976年にして、すでに『翔んだカップル』の登場を待っていたようにも読めるコメントだが、田村が銀次郎を「小気味いい」と感じているのは、こうした時代にありながらも銀次郎が典型的なヒーローとして活躍しつつある反時代性についてであろう。

本宮は女性が強くなっていくことについて、例えば第9巻で高子の父親が「おまえは女の子だ そうむりせんでもいいぞ はっは」と言うのに対して、高子に「そんないい方ってないわ 女性べっ視よ」（本宮 1979, 144-145）と言わせている。第6巻には「成績上位三十名全部女だもん天茶中は……」（本宮 1977b, 186）という言葉もある。しかし第5巻では、高子に「わたしさあ銀ちゃんのためなら三歩うしろをすなおにあるるんだもん」（本宮 1977a, 168）とウツトリした顔で発言させてもいる。

つまり本宮漫画から男性中心の思想が一掃されたわけではないのである。ヒーローの条件として、女性からも強く支持されねばならないことが加わったのは新しいにしても、ヒロインが高スペックの設定となったのは、むしろヒーローのすごさを引き立たせるためではないかとさえ思えるのである。

一方、柳沢はこの頃のことを「肉体的に相手を倒すことは、当時の少年たちにとっては、すでに大きくリアリティを欠くものでした。けれども恋愛、すなわち「恋人を獲得すること」は、これはもう命がけといってもおかしくない切実な闘争を精神的にもたらしているのではないかと思ったわけです」（柳沢 2010, 78）と書いている。つまり、もはや本宮ひろ志のような男らしいヒーローを描いてもリアリティを伴わず、そんなことよりも女性が力をつけてきたことに対して、男性がどう振る舞うべきかを描く時代になったということだろう。

こうやって考えてみると、『翔んだカップル』は、ただ少女漫画におけるラブコメというジャンルを少年漫画に移したというだけでなく、藤本由香里が少女漫画について「自分の存在に関してどうしても否定的な感情を持たないではいられない主人公が、他者による再評価を受けて、自分の居場所を回復する物語——。ありのままの自分を受け入れてもらう物語——。少女マンガの黄金パターン「そんなキミが好き」の物語ももちろんこの範疇にはいる」（藤本 1998, 108）としたような、少女漫画における「少年—少女」の序列を、「少女—少年」の序列に変換して移入したということにもなるかと思う。

ところが宮台らは、こうした少女漫画とは違った次の時代の心性が『翔んだカップル』には窺えるのだとして次のように論じる。

読み手が加齢し、現実の恋愛関係に巻き込まれるようになると、こうした予定調和的なモデルは役に立たなくなってくる。自由恋愛が実際に普及してくると、「性の抑圧」を「愛の障害」として把握するという**60年代的な等式が崩れ、かわりに、性と愛の間の〈関係の偶発性〉が前面に登場してくるのである。**「愛なき性」がありうること。「性の男女差」や「個人差」が巨大であること。愛が「性の一致」を保証しないこと。こうしたことが意識されざるを得なくなるのだ。（宮台・石原・大塚 1993, 167）

つまり、圭のことを愛しているはずの勇介が、杉村の元に通って関係を持ち、また、別の高校に通う絵里とも関係を持つ『翔んだカップル』は、自分が誰を好きなのかはもちろん、自分が何者なのかさえも見いだせない「〈関係の偶発性〉の酷薄さ」が描かれたシビアな作品なのだということなのだという（宮台・石原・大塚 1993, 174）。

ここで彼らのいう「酷薄さ」、つまり勇介の抱えた悩みというのは、それぞれに魅力的な女性の出現を前にふらふらと心が迷い、誰に決めたらいいのかわからないという悩みのことだろうが、これは昨今、流行しているところの恋愛シミュレーションゲーム（ギャルゲあるいはエロゲともいう）における《悩み》ときわめて似てはいないだろうか（これらのゲームの主人公は、特に何の取り柄もないのになぜかモテるとは、よく指摘されるどころだが、その点でも『翔んだカップル』は類似しており、エロゲの原点には『翔んだカップル』があるといった書き込みもネット上に見つけることができた）。

少年漫画におけるラブコメは、少女漫画におけるラブコメと同じく、劣位にある存在が異性に受け入れてもらう物語であるという点で似ていると書いたが、その悩みの性質に関しては違いがある。少女漫画では自分のような存在を誰が理解し、誰が受け入れてくれるのかということで悩むのに対して、『翔んだカップル』における勇介の悩みは、明るく元気でかわいい圭ちゃん、秀才で美人の杉村さん、不良っぽい絵里という3人の女性のうち、どの子に決めたらいいのかという悩みにすり替わっており、「命がけといってもおかしくない切実な闘争」は、少なくとも「恋人を獲得すること」においてなされていない。勇介はダメな存在として、劣位に設定されているにもかかわらず、そんなことは全く棚に上げてしまって、自分が誰からも愛されない可能性について露ほどにも考えていないのである⁵。

宮台らは、これを「＜関係の偶発性＞の酷薄さ」としたのだが、現実問題として、もしも目の前に複数の魅力的な女性がおり、そのうちの誰か一人をパートナーに決めなければいけないという決断を迫られることがあれば、自分とは何か、自分は何を求め、どこに行こうとしているのか…といった切実な悩みにも繋がることはあると思う。しかし、この《悩み》は、それこそ持てる者（モテる者？）の悩みであり、むしろ喜びと表現してもよいような性質のもので、こうした《悩み》を二次元世界で追体験しようとするエロゲの愛好者が星の数ほどに存在していることから考えれば、これを酷薄だとするのは当たっていないように思う。

『翔んだカップル』は、先に引用した田村亮の言葉を使えば、「男性という特権的立場に安住していた男たちが、女性の権利の回復とともに、その自信を失」った時代だからこそ生まれた作品だ（田村 1976, 200）。そこには硬派を気取って、あくまで男らしく、女性の三歩前を歩いていこうとする銀次郎のような反時代的な振る舞いは、もう現実的ではなかった。しかし、男性権威の失墜という辛い事実を受け止めるのと引き替えに、別の意味でのご都合主義的な男性中心主義が生まれたということかもしれない。

『翔んだカップル』においては、友人である中山の事故死や、絵里の傷害事件、陸上部の美人キャプテン・島田の自殺などのシリアスな事件が続き、また、圭ちゃんとの劇的な一体化で終わってもいないために、いかにも勇介は悩みの多い人生を歩んでいるようにも見えるのだが、こと恋愛に関していえば勇介はモテモテで、自分が女性から愛されないかもしれないと疑うことさえなく、誰に決めればいいのかという誠に深刻にして嬉しい問題に悩んでいるだけなのである⁶。

とはいえ、ご都合主義は何も少年向けラブコメに限ったものではない。少女漫画でも、ヒロインは特に何のとりえもないドジっ子なのに、イケメンの転校生やテニス部の部長、生徒会長たちから「そんなキミが好き」と告白してもらえるのだから、都合のよさに関しては少年漫画も少女漫画も五十歩百歩だろう。70年代も後半となって、少年たちは過酷な恋愛レースに挑まなければいけなくなったわけだが、ただレースの苛烈さを訴えるだけでは『翔んだカップル』が「大ホームラン」に至ることはなかつただろう。必ず成功するというセイフティネット（アメ）が用意されていたからこそ、自分たちが過酷な時代にいるという認識（ムチ）を行き渡らせることができたのではないか、とも思うのである。

エロコメの原点として

柳沢は「少年誌ではまだ誰もやっていなかった世界を見つけた私は、あたかも自分で耕した畑が広大なことに気がつき、ここにいくらかでも好きな実を植えられると、それはもう輝くばかりの自分の未来が見えてきたと思っていた」としながら、「しかし、そんな未来はやってきませんでした。垂流の下品でくだらないラブコメが一斉に少年誌で始まっていくからです。しかもそれらの作品に人気まであるのを知り、すっかり嫌気がさし

⁵ 宮台らもこの非対称性について言及しているが、「男性側では「選ぶ側の迷い」を、女性側では「選ばれる側の不安」を主題化しやすいという現実の性的コミュニケーションやそれに関わる理想的イメージの著しい「非対称性」だろう」（宮台・石原・大塚 1993, 176）とするのみで、関心は『翔んだカップル』が「＜関係の偶発性＞の酷薄さ」にまでこれを追及している点の方にあるようだ。

⁶ ただ主人公の悩みが恋愛だけに特化されない傾向が、少年向けラブコメにはあるかもしれない。例えば、あだち充の『タッチ』では恋愛と共に、甲子園を目指すということがテーマになっていた。

てしまうのです」と書いている（柳沢 2010, 107）。

たしかにこの後、史村翔・小野新二の『OH!タカラヅカ』（史村・小野 1980-1983）や、弓月光の『みんなあげちゃう』（弓月 1982-1987）、中西やすひろ『Oh!透明人間』（中西 1982-1987）など、たくさんのラブコメ（というよりもエロコメ）が生まれている。その他にも、高橋留美子やあだち充の作品、柳沢の弟子であった村尾ミオの作品など、あまり下品ではないラブコメもたくさん生まれた（甘すぎて食傷するようなものも…）。また、70年代を特徴づけると言われるエロ劇画ブームもこれらと無縁ではないだろうし⁷、その流れの一つであるロリコンブームは少年誌にも影響し、内山亜紀の『あんどろトリオ』（内山 1982）が「少年チャンピオン」に連載されたりもした。そういえば柳沢の憂鬱もわからなくはない。『翔んだカップル』には、80年代に創刊ラッシュを迎えるヤング漫画誌とはちがって、肉体関係が直接的に描かれることもなかったし、露骨にハダカが描かれることもなかったからだ。ポルノグラフィの要素は、全くここには見当たらない。

しかし、竹熊健太郎・相原コージが「ウケる青年まんがの描き方」としてあげたような青年漫画の典型（エロコメ）も、『翔んだカップル』に原点があったように思えるのである。

エロコメの基本設定は、もうこれ以上はないというくらい単純なものが望ましい。主人公の男は優柔不断な性格だが、デカマラゆえに女の裸がワサワサ寄ってくる。一応、意中のヒロインがいて、こいつだけは処女で身持ちが固いが、それ以外の女は全てインランに描いておけば間違いがなく、アニメタッチで可愛く描けば人気投票もバッチリ!!最終回は当然、ヒロインともセックスだ。毎回、別の女が次々と現われ手をつけるのがストーリーの全てで、要は回転寿司の要領だ!!（竹熊・相原 1990, 95）

これは勇介が杉村さんや絵里と関係を持ちながら、最後まで清純派の「意中のヒロイン」である圭ちゃんとは肉体関係がない『翔んだカップル』にしっかり当てはまる（デカマラやヒロインとのセックスを除けば）。「なにせ、とにもかくにも一いろーんな女とやりまくって犯しまくってフェラチオさせまくって、このまんがの結論といえど…」。「愛!」なのだー!!」というも当たっている（竹熊・相原 1990, 96）。『翔んだカップル』はこうした典型的パターンを、ラブコメ第1作でありながら、ほとんど完成形に近い状態にまで作り上げていたのだということになる。

女性たちが力をつけ、社会的にも活躍を始めた1970年代後期、少年たちは自分の恋愛や結婚にも暗雲が立ちこめていることを予感し、また、かつてのヒーローのような生き方を真似しようにもできないことを認識しはじめていた⁸。彼らは「POPEYE」や「ホットドッグ・プレス」を読み、『見栄講座』を読み、それらを小バかにしながらも、その実、ティファニーのオープンハートの存在や、クリスマスイブのホテルの予約方法をしっかり学び、女性の攻略法について一生懸命に考えていた。

これら三次元世界と平行して、二次元のフィクション世界でも、必死で敵と戦ったりスポーツに挑んだりするヒーローと自分を同一化することが難しくなっていたが、その苦しい自覚を受け入れると共に、決して負けることのないラブコメ戦線を生き抜くラブコメ・ヒーローたちと自分を同一化する傾向が生まれたのではないだろうか。

2013年の現在、男オタク文化の中心的な位置にはラブコメ、エロコメ、エロゲがあるように思うが、その源流は『翔んだカップル』にあったように思えるのである。もちろん源流の一つであって、その他にも源流はいくつかあり、いつしかそれがオタク文化の大河になっていると言った方が正確なのかもしれない。しかし、いざれにしてもオタク文化といえどロボットや美少女の話ばかりになりがちだが、ラブコメ・ブームはもちろん、

⁷ 竹内オサム「少女マンガの台頭とエロ劇画の世界」『戦後マンガ50年史』（筑摩書房：1995.3）など

⁸ 本宮ひろ志の『俺の空』（本宮 1976-1978）は、財閥の御曹司で東大法学部にも合格したという主人公が、旅を続ける途中で様々な女性と関係を持ちながら自己形成するという物語である。従来のヒーロー像に近いが、ラブコメというより、或る種のファンタジー、つまりポルノグラフィとして受け入れられていたように思う。

80年代的なマニュアル文化や消費文化、女性たちが強くなっていったことなども密接に関わっているような気がしてならない。

連載開始からすでに35年も経っているというのに、『翔んだカップル』が生んだヒーロー像や作品構造が未だに主流であり続け、その次の時代の予想が立てにくいことを思えば、『翔んだカップル』がいかに重要な作品であったのか、あらためて知らされる思いがするのである。

【参考文献】

- あだち充、1981-1986（連載）、『タッチ』
- ササキバラ・ゴウ、2004、『<美少女>の現代史 「萌え」とキャラクター』講談社
- 高橋留美子、1980-1987（連載）、『めぞん一刻』
- 竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ、2006、『現代漫画博物館1945-2005』小学館
- 竹熊健太郎・相原コージ、1989-1991（連載）、『サルでも描けるまんが教室』
- 田中康夫、1981、『なんとなく、クリスタル』河出書房新社
- 田村亮、1976、『黄金色に燃える現代のヒーロー＝銀次郎!!』『硬派銀次郎2』集英社
- 中野晴行、2004、『マンガ産業論』筑摩書房
- 永山薫、2006、『エロマンガ・スタディーズ 「快樂装置」としての漫画入門』イーストプレス
- 藤本由香里、1998、『私の居場所はどこにあるの?』学陽書房
- ホイチョイ・プロダクション、1983、『見栄講座 ミーハーのための戦略と展開』小学館
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子、1993、『サブカルチャー神話解体 少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの歴史』パルコ出版
- 本宮ひろ志、1974-1978（連載）、『硬派銀次郎』
- 1977a、『硬派銀次郎5』集英社
- 1977b、『硬派銀次郎6』集英社
- 1979、『硬派銀次郎9』集英社
- 柳沢きみお、1973-1975（連載）、『女だらけ』
- 1976-1982（連載）、『月とスッポン』
- 1975（連載）、『すみこみ学園』
- 1976（連載）、『ぼくちゃん先生』
- 1977、『ぼくちゃん先生』若木書房
- 1977、『すみこみ学園』若木書房
- 1977-1980（連載）、『すくらんぶるエッグ』
- 1977-1979（連載）、『ミニぱと』
- 1978-1983（連載）、『翔んだカップル』
- 1986a、『翔んだカップル 新装版 10』講談社
- 1986b、『翔んだカップル 新装版 13』講談社
- 2010、『マンガの方法論 おれ流 柳沢的マンガの創り方』朝日新聞出版